

D-4 「平和の文化」を未来に

●館山のユネスコ運動

終戦の 1945(昭和20)年11月、ユネスコ(UNESCO 国連教育科学文化機関)は、教育や文化の振興を通じて、戦争の悲劇を繰り返さないとの理念により、ユネスコ憲章を採択し活動を始めた。その前文には「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という理念が謳われている。

その運動は、1947(昭和22)年に世界初の民間ユネスコ運動となる仙台ユネスコ協力会の結成に始まり、その活動が国際的に評価され広がっていったといわれている。翌 48(昭和23)年には千葉県内初の館山ユネスコ協力会(穂坂与明理事長)が設立された。➡ P.40

1949(昭和24)年には、市立館山高校(現県立館山総合高校)定時制の開設に尽力し、日本が 60 番目のユネスコ加盟国となった 1951(昭和26)年には、館山ユネスコ保育園が設立されている。後に特定の組織にその名を冠することが禁じられたため、今では世界で唯一「ユネスコ」の名がついた保育園が、現在もユネスコ精神で子どもたちを育てている。日本が国連へ加盟したのは 1956(昭和31)年になってからである。

●「平和の文化」とは

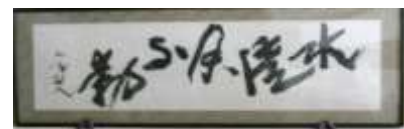
戦争の世紀といわれた 20 世紀から 21 世紀を迎えるにあたり、ユネスコは「平和の文化」という概念を提唱した。それはあらゆる生命を傷つけたり奪ったりせず、争いや対立を暴力によってではなく、創造的な対話によって解決していこうとする考え方や行動様式、価値観のことである。これを受けて国連は、2000 年を「平和の文化国際年」と宣言し、2001～10 年を「世界の子どもたちのための平和の文化と非暴力の国際 10 年」と定めて、「平和の文化」を広めようと呼びかけた。

ところが、2001(平成13)年9月11日のアメリカ同時多発事件を境に、世界は再び暴力の嵐に飲み込まれてしまった。灯されたばかりの「平和の文化」のともし火は吹き消されてしまったかのようである。2004(平成16)年に来日した元ユネスコ平和の文化局長のデビッド・アダムスは、「平和の文化」を社会に実現するためには「ピースツーリズムなどの平和産業の創出が急務である」と言った。

これに共鳴し、「館山まるごと博物館」では「平和・交流・共生」の歴史文化を学ぶピースツーリズムを実践している。

◇ 館山の平和祈念像 ◇

旧安房水産高校(現館山総合高校海洋科)では、1933(昭和8)年に**笹子治**初代校長の銅像を建立したが、戦争中に金属供出となった。笹子校長を尊敬する教員らは石膏型を残した。1962(昭和 37)年、同窓会によって再び建立されたものが現存している。もとの製作者は、後に長崎・平和記念像を製作した著名な彫刻家・**北村西望**であった。同校には、西望による書「水流月不動」も残されている。 ➡ P.33



◆遠藤虚籟・和田秋野

＝綴錦織にこめられた平和の祈り＝

1890(明治23)～1963(昭和38) / 1908(明治41)～2017(平成29)



遠藤虚籟は山形県鶴岡生まれ。16歳で画家を志し、上京。苦学して、太平洋画会研究所で中村不折に師事し、デッサンを学ぶ。しかし生活苦で健康を害して、画家の道を断念。貧困と挫折のなか、信仰に出会い、「霊に導かれ、霊に順う」という順霊の旅に立つ。1922(大正11)年、綴錦織に出会い、32歳にして指導を仰ぐ。

関東大震災を契機として放浪生活をやめて安房北条へ定住し、本格的な作家活動に入る。高村光太郎が注目し励ましたという。以後、入選を重ねる。

1934(昭和9)年、和田秋野と出会う。虚籟のもとへ弟子入りした秋野は、手伝いのかたわら、自らの小作品も織り上げ、徐々に入賞を重ね、名声を高めた。

1940(昭和15)年、奢侈品等製造販売禁止令が出され、絹織物の製造や販売を禁じられたが、芸術保存の観点から虚籟は特別に製作を許可された。自問自答を重ねた末、国家や民族の利害を超えた全人類的な視野に立つ意識の改革が起きた。山川草木生きとし生ける全てを互いに認め尊ぶ、畏敬の気持ちりが大切だと気づく。そこで、一切の戦争犠牲者の冥福と世界平和を祈願する綴錦織浄土曼荼羅を発心するが、戦局の悪化に伴い、郷里鶴岡へ疎開し、一時製作を断念。

敗戦後の1949(昭和24)年、鶴岡ユネスコ協力会を設立、初代会長となる。市民の浄財に支えられて、1950(昭和25)年3月31日に「綴錦織曼荼羅中尊阿弥陀如来像」が完成。虚籟60歳、秋野42歳であった。翌年、仏教連合会と日本仏教鑽仰会を通じ、全日本仏教徒の総意として、国連ニューヨーク本部に贈呈された。

1952(昭和26)年、館山市民に迎えられて再度来房、八幡に工房を開く。1958(昭和33)年、虚籟は館山市無形文化財第一号に指定され、館山市八幡区では名誉区民の称号を贈った。

その後、秋野も館山市無形文化財に指定され、千葉県無形文化財保持者となって、さらに国の地方文化振興功労者として表彰された。最期まで平和の大切さを語り、109才の天寿を全うした。



「戦争犠牲者彼我一切万霊供養 世界平和祈願 綴錦曼荼羅 中尊阿弥陀如来像」-国連本部蔵-

◆島野初子（旧姓：矢部）＝女性運動と幼児教育の母＝ 1895(明治 28)～1985(昭和 60)

山梨県谷村町生まれ。高女在学中から兄の影響で社会主義思想にふれ、津田英語塾在学中に学生運動家となる。卒業後、奥むめおらと「職業婦人社」という結社をつくり、機関紙『職業婦人』『婦人と職業』などの編集にたずさわる。社会主義を信条とする日本最初の女性結社「赤瀾会」を結成。1920(大正9)年、平塚らいてう、奥むめお、市川房江らと新婦人協会を設立、女性参政権獲得運動をすすめる。有島武夫の『種蒔くひと』の呼びかけで、1923(大正12)年3月8日には日本初の国際婦人デーの集いを主催し、開会の辞を担当。

大正大学から東京外国語学校露語科に進学し学生運動家であった館山生まれの島野禎祥(船形の西行寺住職の長男)と出会い、1924(大正13)年に結婚。関東大震災で倒壊した西行寺再建のために1929(昭和4)年に館山へ。寺子屋で英語や習字などを教えるかたわら、東京の労働運動で病気になる青年たちを迎え入れて静養させたという。夫の没後、次女・潮とともに館山白百合学園を設立、英語や音楽を取り入れて世界的視野を育む理想の幼児教育を実践、地域のリーダーを育てた功績は大きい。



写真は1923(大正12)年頃の女性解放運動家たち。右端が初子、その隣がらいてうである。らいてうの父は北条町六軒町(現館山市)に別荘を建てている。

◇底点志向を実践する「かにた婦人の村」◇ ～石の叫び「噫従軍慰安婦」の碑～

売春防止法成立後、社会から見捨てられた女性たちを救うため、1965(昭和40)年に社会福祉法人ベスダダ奉仕女母の家を主宰する深津文雄牧師は、旧海軍砲台山跡地に婦人保護長期入所施設「かにた婦人の村」を創設した。ここでは自主的な更生をめざし、農耕や調理、あるいは陶芸や洗濯などの仕事をするなかで、働く喜びと生きる意味を得ることができたという。

こうして心を癒し人間性を回復した城田すず子(仮名)は、戦後40年を迎える際、慰安婦体験の悲痛な告白をし、仲間の鎮魂を願った。これを受けとめた深津は、鎮魂と謝罪の意をこめて、1985(昭和60)年に「噫(ああ)従軍慰安婦」と刻んだ鎮魂碑を建てた。

TBS ラジオで「石の叫び」として紹介された後、韓国 KBS テレビがドキュメンタリー番組『太平洋戦争の魂～従軍慰安婦』を制作し、NHKをはじめ世界中に発信され、証言者が現われる契機となった。

◇名も無き女の碑◇

鴨川市花房の慈恩寺に「名も無き女の碑」と刻まれた墓石がある。戦時中に衛生兵だった2人の男性が戦後に出会い、戦地にいた慰安婦を悼み、1973(昭和48)年ひそかに建てたものである。



● 大神宮七人様と万石騒動・安房三義民

1682(天和 2)年、大神宮村の農民たちは領主の悪政を訴える安房最初の農民一揆を起こした。領主であった旗本河野氏は、3年続きの大凶作でも厳しい年貢の取り立てをしたので、戸数100戸ほどの村の農民15人は、江戸の河野家に門訴をした。しかし、聞き入れられるどころか、田畑や家を取り上げたうえに追放された。そこで幕府評定所に訴えたが、一人の農民の裏切りにあい農民代表の7人は処刑され、残された家族も追放されてしまったという。その犠牲者たちを村びとたちは「大神宮七人様」と呼んで、その後、供養碑を建立し顕彰してきた。2012(平成24)年に「330年忌法要」が行なわれた。「大神宮七人様」の闘いは、多くの農民たちに教訓を与えたと思われる。

それから30年後の1711(正徳元)年、北条藩の屋代越中守忠位が支配する北条村など27ヶ村の約1万石の領地で、「万石騒動」という大規模な農民一揆がおこった。1703(元禄16)年に元禄大地震が勃発すると、北条藩領の農地が荒れ、用水路が壊れたので、用水路を開いて土地を修復し、米の増収を図ろうとした。そのため代官川井藤左衛門は、藩財政を立て直すため、農民の無償労役や年貢の倍増などを課し、一方的な負担を強いた。そこで数百名もの農民たちは、江戸の屋代家へ門訴をし、老中へは駕籠訴という強行策をとった。たたかいでは江戸に朝鮮通信使が来た機会を利用しての命がけの行動で、一旦は成功したかに見えたが、その後、代官川井は名主3人を見せしめとして処刑し、家族を追放して家財を没収するという強硬手段に出た。農民たちは幕府評定所に訴えたところ、農民の強い願いは取り上げられ勝訴となった。川井は死罪となり、藩主も失政を理由に改易となって廃藩になった。

三義民命日祭法要(11月26日)は、1回忌から33回忌までは通常法要が執行され、1761(宝暦11)年に51回忌、1810(文化7)年に100回忌、1860(万延元)年に150回忌、1910(明治43)年に200回忌が行われている。『千葉県安房郡誌』(1926年刊)には、「毎夜の燈火今に至りて絶ゆることなし。明治四十三年は恰も二百回忌に相当するを以て、有志相議し、三氏の為に記念碑を建設し、事績を不朽に伝えんとし、二十余ヶ月を経て完成せり。国分寺前に一大巨碑の建立せるは即是なり」と記されている。そして、関東大震災直後の1925(大正14)年に「三義民殉難之跡」碑が建立され、1960(昭和35)年に250回忌記念碑、300回忌にあたる2010(平成22)年は「義の伝承碑」が建立された。27ヶ村の名主と農民たちが命をかけて暮らしを守ろうと、強い信頼と固い団結のもとで「誓詞」を交わした傘連判状があったといわれる。犠牲的な精神をもって生きた魂への祈りとともに、「義の心」が後世に語り継がれ、誇りを育んでいる。



傘連判状



万石騒動安房三義民300年祭「義の伝承碑」